



ゼファニア、ヨエル、オバデヤ、ホセア

John S. Sargent (1895)

Boston Public Library 壁画

12の小預言書は、冒頭に、その時代、親の名前、出身地、職業などを記して、著者を紹介していますが、4番目のオバデヤ書と最後のマラキ書にはそれがありません。列王記上18章3節にはアバズ王の宮廷長で、主を畏れ敬う人である「オバドヤ」という名の人物が登場します。オバデヤ書も列王記でも、英語では Obadiah と表記されていますので、同一人物かと混乱させられます。オバデヤは普通名詞で、「主の僕」という意味を表すと言われていますので、人物を特定できないようです。預言者は、どの絵をみても、自らが語る預言に、悲しみ、苦しむ人々であることが感じられます。

オバデヤ書は1章のみの短編であり、最初に「立て、立ち上がって、エドムと戦おう」という宣戦布告のような言葉で始まっていて、緊迫感があります。エドムは死海の南の山地の地名で、その起源はアブラハムの孫、イサクの双子の息子であるエサウとヤコブ兄弟の相克から端を発しているのです。

エサウはヤコブに言った。「お願いだ、その赤いもの(アダム)、そこの赤いものを食べさせてほしい。わたしは疲れきっているんだ。」彼が名をエドムとも呼ばれたのはこのためである。(創 25:30)

兄エサウは親の信仰を軽んじ、異教の女性を妻とし、狩りを得意とする野の人でした。母リベカは計略を立て、信仰を持つ弟ヤコブが長子の権利を得る算段をしたため、ヤコブはエサウから逃亡せざるを得ませんでした。年月を経て、恭順な意を示す莫大な贈り物をして形の上では和解を得ましたが、兄弟は決して和することはなく、住む場所を異にし、別個の部族として対立し、戦い続けてきました。兄弟という最も近い関係であったがゆえに、プライドが許さず、失望すると、反目が強まるのかもしれない。詩編にはエルサレムが陥落した時に、エドムから受けた屈辱が記されています。

主よ、覚えていてください／エドムの子らを／エルサレムのあの日を／彼らがこう言ったのを／「裸にせよ、裸にせよ、この都の基まで。」(詩 137:7) オバデヤ書はこの時代の状況を背景に書かれたのでしょうか。

エレミヤ書には「エドムを攻めよ。戦いに出よ」(49:14)、「テマンには、もはや知恵がないのか」(49:7)と記され、オバデヤ書では「テマンよ、お前の勇士はおびえる。彼らは一人残らず殺され、エサウの山から取り去られる」(9節)、「わたしはエドムから知者を エサウの山から知恵を滅ぼす」(8節)とさらに激しく記しています。

イスラエルからは蔑視されてきたエドムの民は「岩の裂け目に住み、高い所に住みかを設け」とか、「鷲のように高く昇り、星の間に巢を作って」という言葉から、険しい高所に隠れるようにして住んでいたと想像します。産業はなく街道筋の商売、交易で生きていたのではないのでしょうか。けれども兄であったという誇りがあり、「『誰がわたしを地に引きずりおろせるか』と心に思っている」とその傲慢を糾弾されています。オバデヤは、エドムが同盟を結んだ国から追放され、親友に欺かれ、使用人に罵をかけられ、そして滅亡する末路を記し、一方、イスラエルは回復されると預言しています。

この反目の理由は、イスラエルの苦境の際に「お前が離れて立っていた」(11節)、即ちエルサレムの苦しみを眺めていただけ、他国の者がエルサレムの財宝を奪った時、その一人のようであった、逃げて行く者を殺すために分かれ道で待ち伏せし、生き残った者を引き渡すようであった、とエドムの冷笑、無視、無関心を責めています。そして、「主の日は、全ての国に近づいている。お前がしたように、お前にもされる。お前の業はお前の頭上に返る」(15節)と報復の裁きを予言しています。

イスラエルのこの頑なさをご存じのイエス様は、放蕩息子への父の愛を伝え、良いサマリヤ人に見習えと説かれたのでしょうか。兄弟姉妹を持つ私たちも心に留めることが必要な預言書でしょう。